

栗東トレセン 馬診便り

うましん



横田

貞夫 (よこた さだお)

『馬診』の平常業務

前回ご紹介した調教監視から調教監視当番が戻ってくると、午前9時から日常診療の時間となります。競走馬診療所の平常業務の流れを簡単に紹介すると、以下のようになります。

- 9:00 朝礼
- 9:00~10:00 往診時間
- 10:00~12:00 入厩検疫・一般診療・手術など
- 13:00~17:00 一般診療・手術・検査など
- 17:00 終礼

まず朝一番は所員全員が揃っての「朝礼」から一日の仕事が始まります。馬場開場時間の遅い冬の季節には、まだ調教が行われている時間帯での朝礼となりますが、この朝礼には重要な意味合いがあります。事務的な連絡はもちろんですが、継続して治療を施している病馬についての報告、今日一日の診療や予定されている手術や検査についての確認が行われます。特に休日明けとなる水曜日には、月曜・火曜の休日当番者から、診療に関する引継ぎ事項が報告されます。

朝礼が終了すると、入厩検疫が始まる10時までは、継続して診療している競走馬のもとへ担当獣医師が治療へ向かう往診タイムとなります。この1時間の間にトレセン構内の各厩舎を廻り、必要な治療を施すと一息つく間もなく、「入厩検疫」へと向かいます。

入厩検疫 ～トレセンの水際防疫～

入厩検疫というのは、栗東トレセンに入厩してくる競走馬が必ず受けなければならない検査のことを指します。入厩検疫では、トレセンに入厩しようとする競走馬全頭に対して、個別に馬体照合が行われ、入厩しようとしている馬に間違いはないかどうか、また、馬インフルエンザなど所定のワクチン接種が済んでいるかどうかを確認され、馬間違いはもちろんのこと、ワクチン接種に不備のあるものもトレセン構内には入ることはできません。さらに入厩検疫では体温測定や、健康状態のチェックが獣医師員によって行われ、異常が確認された場合には検疫厩舎からトレセン構内への入厩はストップされます。ひとたびトレセンに伝染性の病気が外部から持ち込まれると、競馬開催中止という事態にもなりかねませんので、入厩検疫では入念なチェックが行われています。こうした毎日の作業がトレセンの水際防疫の要となっています。

最近の傾向として、競馬に出走した競走馬は「短期放牧」ということで、栗東トレセン近隣の育成牧場や休養牧場に短期間のリフレッシュのために放牧に出されることが多くなりました。トレセンの厩舎は常に競馬への臨戦態勢にあるため、近隣牧場へ放牧に出されると競走馬もリラックスできるようです。

放牧に出て行く競走馬が多くなるということは、替わりに入厩してくる競走馬も多くなります。10年前には年間5,000頭(新入厩馬1,801頭)ほどであった入厩検疫頭数は、今や一年間に10,000頭(新入厩馬2,039頭)を越えるほどになり、10年前の2倍に

もなっています。新しく入厩してくる馬の頭数があり変わらないのに、入厩検疫頭数がこれだけ増えるということは、競馬出走後の入れ替えがどれほど多くなっているのかを如実に物語っています。

競走馬診療所の午前中は、入厩検疫に5~6名の獣医職員が行っている間も、通常の診療業務や骨折した競走馬の手術などが残りのスタッフで行われています。

手術 ～ターフへの復帰を目指して～

競走馬診療所の午後は、厩舎が午後作業を始める3時前後から忙しくなりますが、それまでに競馬で骨折した競走馬の手術などが行われます。昨年、栗東トレセン競走馬診療所が行った手術は154件。その内訳は競馬や調教で骨折した競走馬の手術が119件、開腹手術が10件、去勢手術が5件、その他の手術が20件でした。*痙攣に伴う開腹手術は待たないで行わなければならない緊急手術ですので、朝早い時間帯や、時には深夜の時間帯にも行われます。

こうして午後5時には競走馬診療所の日が終了しますが、仕事の終了時には朝と同じく競走馬診療所員が全員揃っての「終礼」が行われます。一日を通じて報告をしておかなければならない病気の馬や、当日行われた手術の報告が行われ、日中は個々に忙しく動いている競走馬診療所スタッフが同じ情報を共有できるようにしています。

24時間 365日 ～もの言わぬ競走馬のために～

就業時間は午後5時に終了ですが、手術後の競走馬や長期にわたる治療が必要な競走馬が入院棟で治療を待っています。また、一日に何度も治療をしなければならない競走馬には、厩舎の夜飼いの時間帯である午後8時頃に合わせて治療を行っています。

競走馬という生きものを扱う以上、昼も夜もありません。急に病気となった競走馬に迅速に対応できるように、急患当番を組んで24時間、365日受け入れられる体制を取っています。

「馬のための競走馬診療所」。これが競走馬診療所の第一のモットーです。もの言わぬ馬たちのために、少しでも病気を治してあげることを目標に競走馬診療所は所員一丸となって取り組んでいます。

次回は、競馬開催日における『馬診』の業務について紹介したいと思います。



栗東トレーニングセンター
競走馬診療所 所長。
昭和35年生まれ。
岐阜大学大学院 農学研究科
獣医学専攻を修了し、
1984年日本中央競馬会
(現JRA)入会。
美浦トレーニングセンター
競走馬診療所に7年、
栗東トレーニングセンター
競走馬診療所に8年、
JRA本部
馬事部防疫課・獣医課に
11年勤務して、
2010年3月から現職。

*痙攣:「せんづう」と読みます。いわゆる馬の腹痛のことを意味しますが、馬では腸管が30m近くあり、腹痛を起こしやすいとされています。栗東トレセンでは年間500件ほどの発症があります。



競走馬診療所では、内視鏡を使つての上部気道の検査や、エコー検査による屈腱炎の検査などが日常的に行われています。写真は、長さ3mもある特注の気管支鏡(胃カメラを長くしたものを想像してください)を用いて、モニターに映し出された画像で肺炎の馬の検査をしています。